クロード・モネ作『ラ・ジャポネーズ』の鑑賞（中学２年生）

―『緑衣の女（カミーユの肖像）』との対比を通して―

*立　原　慶　一

Aesthetic appreciation (by second-year junior-high school students) of Claude Monet's La Japonaise: via comparison with Camille (*Woman in the Green Dress*)

TACHIHARA　Yoshikazu

Abstract

The following served as conduits for the understanding of “Japanese culture” as a theme: perception of types of motif and scene, and detection of aesthetic properties from the characterization (expression) of types of motif and scene. Expository images trace motifs and scenes, but this is thought to have delayed the workings of inherent sensitization in appreciation of the works. Yet at the same time it determines the aura of Japanese culture that ought to be sensed as the theme of the painting. As a result, this is a format that still holds fundamental challenges as a means of selecting works. Works suitable for art appreciation classes at second-year junior high level are not those for which “culture” should be understood as the theme. One concludes rather that suitable works are those for which the theme is understood to be “feelings,” for the very reason that they are shaped by the descriptive images that accompany techniques of depiction and coloring.

Key words：aesthetic properties　（美的特性）
expository image　（説明的形象）
working of inherent sensitization　（感性化の営為）
feeling　（心情）
culture　（文化）

はじめに

鑑賞作品としてクロード・モネの『ラ・ジャポネーズ』（1875-1876年、油彩231×142㎝、ボストン美術館）を本絵として取りあげる。これは彼の妻であるカミーユ・モネを描いた作品の一つで、印象派に属するモネ特有の表現方法と、ユニークな表現内容としてのジャポニズム（日本文化趣味）を含んだ作品である。いわば文化という意味の分節が編み込まれた点に特徴がある。対比すべき参考作品として、モネの『緑衣の女（カミーユの肖像）』（1866年、油彩231×151㎝、ブレーメン美術館）を同時に提示する。

この作品は『ラ・ジャポネーズ』と同じく、彼の妻を描いた作品であり、主人公のポーズや構図など似通ってはいる。いずれも三次元的イリュージョン（幻影）の空間表現を基調としているが、とくに彩色法的特徴が明暗の点で全く異なっている。そのため抒情性は正と負ほどの差をもたらすのである。

「中学校学習指導要領美術編」によれば、鑑賞能力とは美的特性（「よさや美しさ」の語を用いている）

＊ 美術教育講座

及び主題（「作者の心情や意図」の語を使用）を感受する能力を指しているのであるが、本授業の目的もその能力を育成させることに置く。「ワークシート」における質問項目は同様に、指導的な観点から設定された。

美的特性に関する類型学的分類としては分析美学者アラン・H・ゴールドマンや同ゲーレン・ヘルメレン[(1)]によるものがよく知られている。ここではその体系的網羅性と理論的強固さという点で、ゴールドマンのそれに勝る、と考えられるヘルメレンの分類法を取りあげる。ヘルメレンは美的特性を6類型に分け、そこに包摂される美的特性を形容する（述語づける）賓辞（述語）のリストを掲げる。本稿ではそれを踏襲して、ワークシートに現れた美的賓辞を項目ごとに書き出してみる。

両作品を対比的に見比べ、気づいたことや感じたことを生徒に語り合わせる。両者の印象や情感がそれぞれ異なることの感性的認識を相互に深めたところで、本絵作品の主題を感受させる方向で鑑賞の授業をまとめる。本絵と参考作品では、正負の価値感情と説明（概念）性・写実性の存否という二つの点で、感じ取られる主題性もかけ離れてくる。両作品を用いた対比鑑賞法は、果たして対他反照的に有効性を発揮しうるのだろうか。その意義と効果を実践的に見極めてみようと思う。

1. 主題感受の諸相

描写・彩色法や構図法、空間構成法などの造形的特徴から生徒によって感受された、美的特性の回数を調査した。6回組10人、5回組20人、4回組23人、3回組18人、2回組38人、1回組26人、0回組12人という結果が出た。彼らは感受回数組ごとにどのような主題を感受したのであろうか。モネ作『ラ・ジャポネーズ』をめぐって主題として把握された各類型＜文化＞、＜心情＞、＜心情・文化＞、＜心情・不感受行為＞、＜不感受行為＞の人数分布を調べてみよう。それを示したのが以下の図表である。

本研究で鑑賞能力の評価としては、ワークシートに記された美的特性の感受回数をカウントすることによって、序列化する手法が採用される。そこでは感受回数が減るほど、主題の感受が困難となるという相関関係が成立する。不感受率は鑑賞能力の目安として、分かりやすい項目となっている。それを調べると本題材にあって、4回組と3回組の間に逆転現象が生じている。4回組は30.5%、3回組は27.7%、2回組は26.4%を占め感受回数が減少するにつれて、不感受者の占有率は意外にも低下している。言い換えれば、主題感受率が高まっている。

だが、この3者には差がほとんど認められないのも事実である。ここでそれらを一括りとして平均値を出せば、不感受率は28.2%となり、3者以外の高回美的特性感受組や低回感受組など隣接する、グループに対する階梯差はなだらかとなる。かくて数値の一部調整を条件として、従来通り本研究の鑑賞能力評価法には信憑性を認めることができよう。以下、この評価法による能力の序列化を基準にして、対比鑑賞のあり方に関する論述を進めていくことにする。

＜文化＞とは端的には「西洋人にとって、日本文化のよさやすばらしさ」、＜心情＞とは「日本文化を度外視し、主人公の心情」を主題として感受した場合を指す。＜不感受＞はワークシートで「主題とは何か」を問われた箇所に無記載なままの者である。また主題を名詞句によって把握したり、場違いにも知見や教訓

	＜文化＞	＜心情＞	＜文化・心情＞	＜心情・不感＞	＜文化・不感＞	＜不感＞
6回10（6.8%）人	4	2	2	1	0	1（10%）
5回20（13.6%）人	8	6	3	0	0	3（15.0%）
4回23（15.6%）人	2	5	5	3	1	7（30.5%）
3回18（12.2%）人	5	5	2	1	0	5（27.7%）
2回38（25.9%）人	17	7	2	1	1	10（26.4%）
1回26（17.7%）人	9	5	1	0	0	11（42.4%）
0回12（8.2%）人	2	0	1	1	0	8（66.7%）
計147人	47	30	16	7	2	45
	（32.0%）	（20.3%）	（10.9%）	（4.8%）	（1.4%）	（30.6%）

として捉えたり、さらに絵画批評を行ったりする者である。彼らの鑑賞活動にあっていずれも感性化はなされていない。＜文化・心情＞とは代表的な主題、二つを並列的に感受した場合である。＜心情・不感受＞は＜心情＞の感受とそれに付随した形でなされた、＜不感受行為＞の複合的な作品把握のあり方である。＜文化・不感受＞は複合性の点で前項と類似し、＜心情＞が＜文化＞に代わっただけのものである。

４回組は他の回数組と比べて、項目ごとの比率に関して様相を著しく異にしているため、例外扱いとしたい。４回組以外における生徒による主題感受の類型は件数の多い順から、「文化」「心情」「文化・心情」「心情・不感」「文化・不感」の並びとなっている。ただし同率は４件ほど生じている。６回組における＜心情＞（２位）と＜文化・心情＞、４回組＜心情＞（２位）と＜文化・心情＞、３回組＜文化＞（１位）と＜心情＞、０回組＜文化・心情＞（３位）と＜心情＞である。生徒による主題感受のあり方は「文化」（32.0%）と「心情」（20.3%）、その並列型（10.9%）、さらに「不感受」（30.6%）のいずれかの類型からなっていると見なしてよい。

西洋人の女主人公が、和服を着ることで喜びや嬉しさの表情を満面に漂わせ、室内の壁や床には日本の風物であるうちわや、扇子が日本文化のムードを一杯に醸しだすため、整然と散りばめられている。このように作品は名詞的説明的な形象によって表現されている。あたかも言葉によるような秩序づけに依存し、西洋人にとっての日本文化趣味という概念が造形化されている。いわばフランス人の画家モネが行ったモチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）は、文化のよさやすばらしさの表現として極めて精緻なものとなっている。

この事実を鑑みるならば、本絵の主題を女主人公の心情として捉えただけでは、絵の鑑賞の仕方として不十分であろう。「西洋人にとっての日本文化のよさやすばらしさ」こそが、絵の主題として把握されるべきだろう。実際、「文化」的特質を主題として感受した生徒の数が、「心情」を抑えて第１位になっている。この感じ方が本題材実践における鑑賞体験のモデルとなろう。

２. 主題感受の諸相の事例

以下に事例をあげる。

１）文化

「日本文化の鮮やかさ」「日本文化のよさ」「日本文化のすばらしさ」「日本文化の華やかさや優雅さ」「和の美しさ」「和服のきれいさ」「和服の美しさ」「日本文化のきれいさ」「日本文化のよさや嬉しさ」「日本文化に触れた感激と喜び」「日本文化に触れた楽しさ」「和と洋の混合（融合）の美しさ」「日本文化の活き活き感」「日本文化の魅力」「和服の鮮やかさ」「日本の物が好きで、特に和風を好んでいる様子」「外国人の和風化好み」

２）心情

「華やかで自信に満ちた自らの美しさ」「女性の優雅で自信に溢れた感じ」「女性が嬉しく喜んでいる気持ち」「自らの華やかさ」「自分の優雅さ」「女性の明るさ」「女性の楽しい気持ち」「人生の華やかさ」「和服を着て楽しい感じ」「楽しさや幸福感」「自分だけはきらびやか」「自信に溢れた感じ」「華やかさを楽しんでいる私、自信に満ちた様子」

３）文化・心情

「日本文化の華やかさと自分の美しさ」「和と洋の混合のよさ。女性の楽しい気持ち」「和のよさを表現したかった。色づかいで人物の明るさを表したかった」「和の美しさ。主人公の楽しさ、嬉しさ」「色や表情の明るさで、和の楽しさを表現」「日本文化の活き活きとした感じや、人物の明るくきれいな感じ」「日本文化の魅力。女主人公の自信」「日本文化のよさ。明るい心」「着物を着たときのうきうき感。自分の美しさ」「和と洋の対比。自分の明るい気持ち」

４）心情・不感受（非感性化・知的理解）

「女主人公の華やかさ、楽しい気持ち。自由に生きていくことの大切さ」「女主人公の明るさ優雅さ。ゆっくり動く時間をそのときそのとき楽しむことの大切さ」「人生の華やかさ。日本文化」「着物、自らの美しさ。外国と日本との交流」「着物の豪華さと自らの美しさ。西洋人が和風の服を着て、日本との距離の近さを感じること」

5）不感受（非感性化・知的理解）

＜名詞句＞

「西洋と日本の融合」「自己主張」「日本文化」「女の人が着ている服装（ファッション）」「外国との交流」「女性と着物のコンビネーション」「金髪の女性が和服を着ることのギャップ」「外国と日本とのつながり」「The 和」「和と洋の表現」「日本文化と異文化の交流」

＜教訓＞

「若いと何にでも挑戦できて、世界や身の回りが明るく見える」「自分に自信を持つだけで、自分が美しくなる。自信がないままだと、何も始まらない」

＜知見＞

「自由に生きることの大切さ」「自分に自信を持つと明るくなれる」「人が本当に楽しんでいるとき、人の顔は一番美しく輝いて見える」「人の気持ちは見た目だけでは分からない」「文化とは外国人も楽しむもの」「外国人が他国の服を身につけ、似合っていたとしても、心の中では窮屈な感じがしていて、隠しても衣服などによって自ずと表現されてしまう」「こちら（モネ）側には飽き飽きしたが、日本は楽しそうな所だ」「自分にそれぞれ合ったことをしないと、ストレスをためこんでしまうので、意味がない」「嬉しいこともあるけど、悲しいこともある」

＜絵画批評＞

「人物の心情によって絵が明るくなること」「やわらかい絵を描くための方法」「背景が暗くなっているのと明るくなっているのでは、表現効果が異なる」「作者は色によって、人の気持ちを表したかった」「日本文化と作者の内心を表している」

＜名詞句的把握と絵画批評＞

「主人公の感情。日本文化を伝えたかった」

3. 対比鑑賞法における参考作品の意義と効果

作品対比は果たして中学２年生の主題感受に貢献したのだろうか。そうした観点から題材実践を反省してみよう。

今回の対比鑑賞法は本来の主題とされる「日本文化」的特質の把握ではなく、副題である「心情」の把握に偏向させてもいる。「日本文化」を度外視し、「心情」を単独で感受させたケースもある。また生徒が「日本文化」に併せて「心情」を主題として感受するなど、並列型の作品把握に向かわせもした。さらに「心情」感受を中心に、不感受（非感性化・知的理解）活動を導いてもいたようだ。これら鑑賞体験のスタイルは参考作品『緑衣の女（カミーユの肖像）』が放つ、負の抒情性に強く影響されていよう。それは生徒における主題感受のあり方を、「心情」に一層強く焦点づけたようだ。その点で共通する。

このように教育的効果が疑問視され、参考作品としての適切性が問題となる。本題材は遺憾にも対比鑑賞法のあり方の望ましくない事例となってしまったのであろうか。次に、その実態を検討してみよう。

1）対比鑑賞法が「日本文化」的特質の感受に無効の場合

「日本文化」の特質を主題として感受した＜文化＞＜文化・心情＞＜文化・不感＞の類型で、対比鑑賞法がその営為を導かず遺憾にも無効に終わった事例は６回組６人中５件（83.3%）、５回組11人中８件（72.7%）、４回組８人中６件（75.0%）、３回組７人中７件（100.0%）、２回組20人中18件（90.0%）、１回組10人中９件（90.0%）、０回組３人中３件（100.0%）、合計56件に及んだ。これは全体65件の86.2%に達する。グループ全体に占める無効の割合に着目するならば、全ての感受回数組にあって、対比法の効果が一律に甚だしく認められなかった。この結果が方法論的意義に反するところは大きい。本来的な感性化営為からはズレているのである。

事例１

対比鑑賞への質問「二枚の絵を対比し、気づいたことをまとめてみよう」（以下略す）

生徒の回答「人自体を目立たせようとしているところと、人の顔だけ目立たせて心情を分かりやすくしているところ。周りにいろいろなものがあって目立たせているところと、何もおかずシンプルにしているところ」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から、「目立った」（反応特性）「シンプルな」（趣味特性）という美的特性が感知されている。

ここで「感受」ではなく、「感知」の語を使ったのは以下の理由からである。同じ直観的な把握であっても、造形的な美術鑑賞ではなく、日常的・世俗的な場面（表情と身振りの体験）で多く働くことを意味させ

るためである。本稿で、それは鑑賞に本来的な感性化営為ではないことを、明示しておきたい。いずれにせよ比較体験は日本文化を度外視して、女主人公の心情の感知に向かっている。

絵の主題に対する質問「作者が①の絵で表現したかったことは何だろう」（以下略す）

主題に対する生徒の回答「西洋人が和にふれたときの嬉しさや喜び（感情特性）」

事例２

比較体験についての回答（以下「比較体験」と略す）「①ははなやかで周りに物が落ちているため、寂しさはあまりないが、②は物がなくシンプルなため、同じ暗い色づかいでも、②が悲しそうに見える」。両女主人公の心情として、モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から「華やか」（趣味特性）「寂しい」（感情特性）「シンプルな」（趣味特性）という美的特性が感知され、描写・彩色法の造形的特徴から「悲しい」（感情特性）という美的特性が感受されている。比較体験は心情の感知と感受に向かっている。

主題に対する生徒の回答（以下「主題に対して」と略す）「和と洋でそれぞれのよさ（趣味特性及び形態特性）があること。合わせることで今までなかった美しさ（趣味特性）が感じ取れること」

事例３

比較体験「どちらも女性が中心。上半分が暗い。輪郭線がない。振り向き様のポーズと表情。影を色で付けている。これらの共通点がある。②の女性の方がより奥に居る」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）の仕方と、構図法や空間構成法、描写・彩色法など知的に認識できた造形的特徴の共通点と、差異点について述べている。しかし比較体験で美的特性の感知や感受はなされていない。

主題に対して「着物のきらびやかさ、雅な（趣味特性）雰囲気」

事例４

比較体験「どちらも服が目立っている。背景がどちらも暗く、光があまり入っていない。女性の気持ちが表現されている」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から、「目立った」（反応特性）「暗い」（自然特性）という美的特性が感知されている。さらに明示されてはいないものの、女性の気持ちが察知された模様である。ただし比較体験で美的特性の感受はなされていない。

主題に対して「日本文化のすばらしさ（趣味特性）」

事例１～４とも比較体験の中身と主題感受の間に情感的脈絡は見出せない。それ以前に比較体験でかろうじて美的特性の感知はなされているものの、感受はわずかしかなされていない。日本文化に特有な美的特性の感受、という感性化営為の前提なしに不可解にも突然、「日本文化」の特質が絵の主題として感受されている。鑑賞活動で感性的なあじわいの体験における時間経過的な深まりはなされなかったのである。その事例が全64件中56件もあるという点で、鑑賞題材として問題を残していよう。

2）対比鑑賞法が「日本文化」的特質の感受に有効な場合

逆に有効性を示したのは６回組６人中１件（16.7%）、５回組11人中３件（27.3%）、４回組８人中２件（25.0%）、３回組７人中０件（0.0%）、２回組20人中２件（10.0%）、１回組10人中１件（10.0%）、０回組３人中０件（0.0%）で、合計９件ほどしかなかった。無効の場合が56件もあったので、成績的に見て心許ない思いがする。

中回美的特性感受者である２回組の２件が、高回美的感受組に比べやや多い点が目立つ。ただしグループ内比率は10%にすぎない。ここで中回感受者とは４、３、２回組を、高回感受者とは６、５回組を、低回感受者とは１、０回組を意味させる。グループ全体に占める有効性の割合に着目するならば、「日本文化」の特質を感受する上において対比鑑賞法は鑑賞能力低位者（１名）に対してよりも、高位者（４名）にパイプ役として大きく働きかけたことが分かる。グループ内比率も５回組27.3%、４回組25.0%と高い。

このグループでは、遺憾ながら本絵作品『ラ・ジャポネーズ』単独における描写・彩色法など造形的特徴の違いから美的特性が感受され、それが導き手となって「日本文化」の特質が主題として感受されたのではない。参考作品『緑衣の女（カミーユの肖像）』との対比鑑賞によって、画面全体における造形的特徴の違いから和風と洋風をそれぞれ感じ取った点に、感性的なあじわい化の営為が見出せるのである。

「日本文化」の特質が感受される場合、印象派に特有な生命感溢れるタッチや陰への明るい色遣いは、生

徒の鑑賞活動に貢献しなかった。言い換えれば、それは主題感受への導き手とならなかったのである。それにしても対比鑑賞が一定の鑑賞能力を有した生徒（５回組、４回組）にとって、密度ある鑑賞体験になるために寄与できた意義は認められよう。ただしそれは、あくまでも鑑賞能力低位者と比べた上での特徴であって、全体の数は絶対的に少ないという問題を残す。

事例５

比較体験「洋風よりも和風が強調されている」

主題に対して「和と洋を融合させたときの美しさ（趣味特性）」

事例６

比較体験「②の方が先に描かれた絵で、同じようなポーズであっても、②は暗いイメージだが、①は赤が印象的で、段々と雅な日本の文化に影響されているような感じがした」

主題に対して「日本文化のよさ（趣味特性及び形態特性）」

事例７

比較体験「人の表情、心情が逆。服も鮮やかな色と、暗い色とで逆。和と洋の違いがある」

主題に対して「和の鮮やかさ（趣味特性）」

事例５～７ともに両作品の比較体験から得られる美的特性と、主題感受の間に情感的脈絡が認められる。感性化営為における時間経過的な深まりがなされた点に注目してよい。

3）対比鑑賞法が「心情」の感受に無効の場合

「心情」を主題として感受した＜心情＞＜文化・心情＞＜心情・不感＞の類型で、対比鑑賞法が無効であった事例は６回組５人中２件40.0%、５回組９人中４件44.4%、４回組13人中12件92.3%、３回組８人中６件75.0%、２回組10人中７件70.0%、１回組６人中４件66.7%、０回組２人中２件100.0%、53人中合計37件69.8%であった。中回美的特性感受者にあって、無効例25件を数え全体の約７割を占めるほど、他と比べて多いのが特徴的である。彼らが「心情」を主題として感受する場合、対比鑑賞法は効果を発揮できなかった。高回感受組にとって有効だが、４回組92.3%、３回組75.0%など中回感受組に位置する標準的な能力の生徒にとって、無効だった。ということは本題材が「心情」の感受一般に寄与しなかったということになる。

事例８

比較体験「一枚目の絵は人物を明るい色で描き、なお背景を暗くして、主役を際立たせる絵になっている。二枚目の絵は背景も人物も黒であり、主役も闇にとらわれてしまっているような絵になっている」。描写・彩色法の造形的特徴から、「際立った」（反応特性）という美的特性が感受されているレベルに留まり、比較体験は心情の感受に向かっていない。

主題に対して「主役のはなやかさ（趣味特性）や楽しそうな（反応特性）雰囲気」

事例９

比較体験「①では背景にうちわがあるが、②には背景にものがない。②は周りの色と背景が同化しているが、①はしていない」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）の仕方と、描写・彩色法の造形的特徴が述べられているだけで、美的特性の感知や感受はなされず、心情の感受からほど遠い関係にある。

主題に対して「自らの美しさ（趣味特性）」

事例10

比較体験「どちらの絵も女性を中心に置いて際立たせているが、①の絵は着物のやわらかさ、②の絵はスカートの堅さを描いている」。構図法の造形的特徴から、「際立った」（反応特性）という美的特性が感受されている。心情を主題として感受することに遠く及ばないのである。

主題に対して「作者は全体的に背景を明るめにし、女性の喜んで（感情特性）いる心情を表そうとしている」

事例10では、「やわらかい」「堅い」という美的賓辞が提起されることで構図法以外に、描写・彩色法の造形的特徴から美的感受がなされている。ゲーレン・ヘルメレンの６分類法によれば、いずれも「自然特性」に類別される。しかし遺憾ながら、それが必ずしも主題感受への導き手となっているわけではない。

全事例で単に造形的特徴が指摘されたり、たとえそれから美的特性が感受されたりしたとしても、比較体験の内容と主題感受は情感的に見てズレを呈している。ここで対比鑑賞法が「心情」感受へのパイプ役として、有効であった事例は認められないのである。

4）対比鑑賞法が「心情」の感受に有効の場合

逆に有効性を発揮したのは、６回組５人中３件

60.0%、５回組９人中５件55.6%、４回組13人中１件7.7%、３回組８人中２件25.0%、２回組10人中３件30.0%、１回組６人中２件33.3%、０回組２人中０件０%、53人中合計16件30.2%であった。しかもこの事例は高回（８件）及び中回（６件）美的特性感受者に多く見られるのが特徴的である。グループ内比率も６回組60.0%、５回組55.6%と高い数値を示している。一定の鑑賞能力を有する生徒が「心情」を主題として感受する場合、対比鑑賞法は有効に機能していたのである。その点に関しては、実践的方法論としての意義深さが窺われる。

事例11

比較体験「一枚目は女性が楽しそうで華やかなイメージだけど、二枚目は闇にとけこんでしまいそうな悲しさである」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から、「楽しい」（感情特性）「華やかな」（趣味特性）「悲しい」（感情特性）という美的特性が感知されている。

主題に対して「華やか（趣味特性）で、自信に満ちた（行為特性）自らの美しさ（趣味特性）」

事例12

比較体験「着ているものが和服とドレスで違うし、①は金色系で派手だけど、②は黒色系で目立たない感じ。顔について①は楽しく嬉しそうだけれど、②は悲しい感じ。①は光で明るい感じで、②は闇で暗いという感じ」。これは前例と同様に、モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から、「派手な」（趣味特性）「目立つ」（反応特性）「楽しい」（反応特性）「嬉しい」「悲しい」（感情特性）「明るい」「暗い」（自然特性）という美的特性が感知されている。

主題に対して「優雅（趣味特性）で楽しく（反応特性）明るい（自然特性の感情特性へのメタファー的拡張）感じ」

事例13

比較体験「①と②の女性は髪型が少し似ている。また顔も似ている。立ち振る舞いが似ている。若々しい女性（①）に対して、初老の女性（②）は輝かしい時が去っていく、老いの恐怖を示している」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から、「若々しい」（自然特性）「輝かしい」（自然特性の感情特性へのメタファー的拡張）「老いた」（自然特性）「恐怖感」（反応特性）という美的特性が感知されている。

主題に対して「若さ（自然特性）を謳歌し、人生を喜び（感情特性）に感じている」

事例14

比較体験「①と②を比べると、①は派手で、②はシンプル。床が明るいのが同じ。顔がはっきりしているのが同じ。①は楽しさ、②は寂しさの表現になっている」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から、「派手な」「シンプルな」（趣味特性）「明るい」（自然特性）「楽しい」（反応特性）「寂しい」（感情特性）という美的特性が感知されている。

主題に対して「女性の楽しさ（反応特性）」

事例15

比較体験「どちらも女性が主人公になっていて、目立つ構図。どちらも上が暗く、下は明るめ。①はぼかしたりすることで、さらに華やかに見えるようになっているが、②は背景の黒色に溶け込むようにしたりしている。しかし顔ははっきりと描くことで、暗さが目立つ」。構図法と描写・彩色法の造形的特徴から、①では「目立った」（反応特性）「華やかな」（趣味特性）、②では「暗い」（自然特性の感情特性へのメタファー的拡張）という美的特性が感受されている。

主題に対して「自らの華やかさ（趣味特性）に恵まれた」

この結果からは次の知見が看取されよう。「心情」は両作品の正負をめぐる、抒情性の違いを互いに際立たせることによってもたらされたのである。ただし折角「心情」が主題として感受されたものの、それは絵の副題にすぎず、遺憾ながら鑑賞体験のモデルからややかけ離れたものになってしまっている。

5）対比鑑賞法のあり方が主題不感受の内容に影響を与えた場合

主題不感受の場合で、対比鑑賞のあり方が不感受の内容に影響を与えた事例は、６回組１人中１件、５回組３人中２件、４回組７人中４件、３回組５人中２件、２回組10人中２件、１回組11人中１件、０回組８人中２件、合計14件であった。中回美的特性感受者は全14件中８件ほどカウントされ、約６割の多くを占めているのが目立つ。本事例は標準的な能力の生徒にとって、一般的な傾向を示すものだと見なせよう。鑑賞活動では感性的な味わい化がなされず、専ら知性化がなされたため、主題感受が成就しなかった点が遺憾

である。

事例16

比較体験「背景や身に付けている衣服によって、伝えたいものが変わっている。①は日本文化、②は女の人の気持ち」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）が異なってくることから、主題の違いが察知された模様である。ただし主題を述語づける形容語が記されていないので、感性的な味わいは豊かになされていない。

主題に対して「外国人が他国の衣服を身につけて、似合っていたとしても、心の中では窮屈な感じがしていて、隠しても衣服などによって表現されてしまうものだ」（非感性化・知見）。一定の知見が得られるレベルに留まるが、服飾文化のあり方を内容としている点で比較体験と共通する。

事例17

比較体験「①の絵は顔や動作から喜んでいることが分かるが、着物に描かれている武士の顔から心の中は逆、②は動作や仕草から沈み込んでいる様を表している」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から、①では「喜び（に満ちた）（感情特性）」、②では「（悲しみに）沈んだ」（感情特性）という美的特性が感知されている。

主題に対して「①は心の中の思いを表すときも、時と場合によっては必要だ、ということを表している。②は思ったことをありのままに動作や仕草として表す、前向きな姿勢も大切だということ」（非感性化・知見）。知見のレベルに留まるが、表情や身振りによる心情表現のあり方を内容としている点で比較体験と共通する。

事例18

比較体験「①における婦人は赤色で明るい感じに見えるが、②における婦人は全体的に黒色が多く暗い感じに見える」。描写・彩色法の造形的特徴が知覚され、それから「明るい、暗い」（自然特性の感情特性へのメタファー的拡張）という美的特性が感受されている。

主題に対して「作者は色によって人の気持ちを表したかった」（非感性化・絵画批評）。鑑賞体験が絵画批評に向かってしまったが、色彩表現のあり方を内容としている点で比較体験と共通する。

事例19

比較体験「①の女の人は自分に自信がある感じだが、②の女の人は自信がなく、消えてなくなってしまうような感じ」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から①では「自信（に満ちた）」、②では「自信（の失せた）」（行為特性）という美的特性が感知されている。

主題に対して「自信を持つだけで自分が美しくなり、自信がないままだと何も始まらない、みたいなことを表現したかった」（非感性化・絵画批評）。絵画批評に傾くものの、生き方において自信を持つことの、有意義性を内容としている点で比較体験と共通している。

事例17、18、19にあっては、参考作品との対比鑑賞が一部で美的特性の感受をもたらし、感性化的営為を動機づけたようだ。しかし比較体験は、主題不感受営為の中身に対して質的に同一的な影響を与えたものの、遺憾ながらそれらは功を奏さなかった。むしろ生徒の知性や想像力を活発に働かせる方向に向かってしまい、独自の物語（自己世界の意味づけ）化を進展させた。結果的に彼らは知見や絵画批評に辿り着いたのである。ただしそこにあって感性の働きは認められず、ありうべき鑑賞体験になりえていない。

6）対比鑑賞法のあり方が主題不感受の内容に影響を与えない場合

逆に主題不感受者の内で、対比鑑賞法がその不感受内容に影響を与えなかった事例は、6回組1人中0件、5回組3人中1件、4回組7人中3件、3回組5人中3件、2回組10人中8件、1回組11人中10件、0回組8人中6件、合計31件にのぼった。中回美的特性感受者は全31人中12件（41.9%）、低回美的特性感受者は全31人中18件（58.1%）ほどカウントされ、後者が前者より6件も多いなど、能力差がこの数値に端的な形で表れているといえよう。

ここでは鑑賞活動に知性が絡むことによって、方法論としての比較体験と主題感受行為が、ちぐはぐになってしまっている。その様子を知ることができる点では興味深い。なお1回組10件、0回組8件と、低回美的特性感受者が多数を占めているのが分かる。主題不感受者と美的特性の低回感受者にあって、相互に重なり合った部分が多いのである。そうした事態は今回の対比鑑賞法に問題が潜んでいることを示していよ

う。

事例20

比較体験「着用している衣服の堅さが異なる。女性が共に主役として目立っている。二人の表情が異なる」。モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から「堅い」（自然特性）「目立った」（反応特性）という美的特性が感知されている。

主題に対して「外国と日本の交流」（名詞句的把握に留まり不感受）

事例21

比較体験「二つとも何かを強調している。背景は暗く、主役となるものは明るい」。明示はされていないが、ある表現意図が察知された模様だ。モチーフ・情景の性格（表情と身振り）づけから「暗い」「明るい」（自然特性）が感知されている。

主題に対して「日本の文化について」（名詞句的把握に留まり不感受）

事例22

比較体験「どちらも真ん中に大きく女の人が描かれているが、①の方が明るく、②が暗いため、②と①の表情が正反対」。空間構成法及び構図法の造形的特徴が述べられ、さらにモチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）から、「明るい」と「暗い」（自然特性の感情特性へのメタファー的拡張）の違いが感知されている。

主題に対して「大人でも自分の欲しいものや、やりたいことを手に入れたり、行ったりすると、子どものようにうきうきして無邪気になってしまうこと」（非感性化・知見）

事例23

比較体験「どちらもバックは暗い色を使っているが、①は着物が目立つ。②は上半身がほとんどバックと一体化していて分かりにくい。①ではバックにあまり明暗の差がないが、②では右下が対照的に明るくなっている。どちらも胴体は正面を向いていないが、①で顔は正面、②では後ろを向いている」。描写・彩色法の造形的特徴から「目立った」（反応特性）という美的特性が感受されるとともに、モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）の特徴が述べられ、同時にそれから「明るい」（自然特性）が感知されている。

主題に対して「自分に合ったことをしないと、ストレスをため込んでしまう」（非感性化・知見）

事例24

比較体験「パッと見て、対照的な絵。どちらも周りの色と違う色を使うことで、目立たせている」。第一印象が述べられるとともに、描写・彩色法の造形的特徴から「目立った」（反応特性）という美的特性が感受されている。

主題に対して「人の気持ちは見た目だけでは分からない」（非感性化・知見）

以上の事例にあって、比較体験は主題不感受営為の中身に対して、質的な影響を一切与えていない。感性が行方不明となる反面、知性が大きくせり出すことによって、主題は折角の比較体験が生かされず、名詞句や一定の知見として知的に把握されていったのである。

４．主題感受（把握）の導き手―モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）からの感知か、画面全体からの美的特性の感受か―

モチーフ・情景の種差を知覚、もしくはその性格づけ（表情と身振り）から美的特性を感知することによって、その後における主題感受（把握）が達成されているのか。それとも両画面全体に見られる造形的特徴の違いから、それぞれ美的特性を感受したことによるのか。いわば真正の感性化営為に導かれているのか否か。前者を「主題把握」、後者を「主題感受」という語で分けて言い表す。これらの課題を明らかにするべく、生徒がワークシートの「対比鑑賞」の欄に記入した文章に着目する。

１）「日本文化」的特質の感受と美的特性の感受

「日本文化」に関する主題感受者で、両画面全体における造形的特徴の違いから、美的特性の感受を前提とした生徒は以下の通りである。６回組６人中３件、５回組11人中２件、４回組８人中０件、３回組７人中０件、２回組20人中２件、１回組10人中０件、０回組３人中０件、65人中合計７件。６回組や５回組では双方合わせて５件に達するなど、高回美的特性感受者がこのグループで大多数を占めるのが特徴的である。彼らにあって感性を働かすことを主体とした、真正な感性化的営為がなされていることで注目を引く。

事例25（感受）

比較体験「①は赤色が鮮やか（趣味特性）なのが印

象的で、日本文化に影響されているような」
主題に対して「日本文化のすばらしさ（趣味特性）」
事例26（感受）
　比較体験「①の絵は色づかいが多く華やか（趣味特性）だけど、②の絵は暗く闇に飲み込まれそうな背景になっている」
主題に対して「日本文化の華やか（趣味特性）さ」
事例27（感受）
　比較体験「①の絵は明るく優雅（趣味特性）でゆったりとした（行為特性）感じだけど、②の絵は暗く悲しく（感情特性）消えていくような（行為特性）感じ」
主題に対して「日本文化の雅び（趣味特性）さ」
事例28（感受）
　比較体験「①の方は派手で豪華な（趣味特性）感じがする。②の方は暗く（自然特性の感情特性へのメタファー的拡張）不安げな（反応特性）感じがする」
主題に対して「日本文化のきらびやかさ（趣味特性）感」

2）「日本文化」的特質の把握とモチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）からの感知

「日本文化」を主題として把握した者で美的特性の感受ではなく、和服や扇子、うちわなどモチーフ・情景における種差の知覚及び、同性格づけ（表情と身振り）から創発する美的特性の感知を前提とした生徒は、６回組６人中３件、５回組11人中９件、４回組８人中８件、３回組７人中７件、２回組20人中18件、１回組10人中10件、０回組３人中３件、65人中合計58件の多数に及んだ。

高回美的特性感受者における、モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）からの感知12件と比べて、中回感受者は33件（その内、種差の知覚は4件）を占めるなど、鑑賞能力中位者におけるほど知覚や感知件数の多さ、さらに低位者ほどその比率の高さ（100%）が目立つのである。彼らはモチーフ・情景における種差の知覚や、表情と身振りからの感知に基づく鑑賞活動のレベルに、留まっているのが注目される。鑑賞をめぐって本来的な感性化的営為がなされたわけではない。

事例29（種差の知覚）
　比較体験「①はうちわを使っている、②は何も使わず色で表している」
主題に対して「着物を着てうちわを使って嬉しい（感情特性）気持ち」
事例30（美的特性の感知）
　比較体験「和のものが多く描かれている」
主題に対して「和の楽しさ（反応特性）、美しさ（趣味特性）」
事例31（美的特性の感知）
　比較体験「使われている色と、影の中でも明るさが違う。①の方は影でも、少し明るいが、②は暗い。①は描かれているものとして、和服を着た外国婦人だけではなく日本のうちわなどが散りばめられ、また明るさを見ても夏に近い季節のように感じられる。②の方は影も暗く、ドレスが厚手のものなので冬に近い季節に感じられた」
主題に対して「外国と日本文化の交流の朗らかさ（感情特性）」

3）「心情」の感受と美的特性の感受

「心情」の主題感受者で、造形的特徴から美的特性を感受することが前提とされた生徒は、６回組５人中５件、５回組９人中９件、４回組13人中13件、３回組８人中６件、２回組10人中７件、１回組６人中１件、０回組2人中２件、53人中合計43件であった。高回美的特性感受者が14件及び中回感受者が26件に達するなど、鑑賞能力高・中位者におけるほど一連の鑑賞活動で感性化的営為が相当数なされた。その件数の多さが目立つのである。

事例32（感受）
　比較体験「①は筆のタッチが柔らかく（自然特性）、ゆったりと（行為特性）流れるよう（自然特性の趣味特性へのメタファー的拡張）である。②は線が直線ぽく（形態特性）、硬く（自然特性）見える」
主題に対して「女性の雅びさ（趣味特性）」
事例33（感受）
　比較体験「背景は①がはっきり（形態特性）、②はくっきり（形態特性）。全体的に①は優雅（趣味特性）だが、②はシンプル（趣味特性）」
主題に対して「華やか（趣味特性）で恵まれた感じ」

４）「心情」の把握とモチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）からの感知

「心情」の把握にあって美的特性の感受ではなく、モチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）からの感知を前提とした生徒は、６回組５人中０件、５回組９人中０件、４回組13人中０件、３回組８人中２件、２回組10人中３件、１回組６人中５件、０回組２人中０件、53合計10件であった。中回感受者で５件及び低回感受者で５件をカウントできるほど、鑑賞能力低・中位者に件数の多さが目立つ。

事例34（美的特性の感知）

比較体験「①は女性が楽しそう（反応特性）で華やか（趣味特性）だけど、②は闇に溶け込んでしまいそうなはかなさ（感情特性）がある」

主題に対して「華やか（趣味特性）で自信に満ちた（行為特性）自らの美しさ（趣味特性）」

事例35（美的特性の感知）

比較体験「①は楽しそうな（反応特性）表情、②は悲しそうな（感情特性）表情。①は自己アピール、②は消え去りたいポーズ」

主題に対して「女主人公の明るさ（自然特性の感情特性へのメタファー的拡張）」

事例36（美的特性の感知）

比較体験「①は日本に旅行に来たお金持ちの人、②はそこまでお金のないひとりぼっちのかわいそうな（感情特性）人」

主題に対して「人生の華やかさ（趣味特性）に恵まれた」

「心情」の主題感受にあっては、描写・彩色法の造形的特徴から美的特性を感受した43名の方が、モチーフ・情景の種差を知覚したり同性格づけ（表情と身振り）から美的特性を感知したりすることによって、主題把握に辿り着いた10名より約４倍も多いのである。ただし中回美的特性感受者及び低回感受者にあって、「心情」はモチーフ・情景の性格づけ（表情と身振り）からの感知が前提となって、主題として把握された。それに対して、高回感受者においては造形的特徴から美的特性を感受することが前提となって把握されるのが、一般的であることが判明する。後者にあって、鑑賞能力に裏付けられた感性化的営為が、着実になされている事情を窺うことができる。

まとめ

これまで『緑衣の女（カミーユの肖像）』を参考作品とした対比鑑賞法を試みてきた。その意義と効果について判明した点を振り返ってみよう。「日本文化」の特質を絵の主題として感受した、全ての美的特性感受回数組にあって当該方法の成果が認められない点で、本題材は問題を残していよう。

「心情」単独は主題として約２割の生徒によって直観的に捉えられたが、それに関しては『緑衣の女（カミーユの肖像）』との対比法が有効に作用した。それは「心情」をめぐる価値感情的に見て、本絵と相反するような負の抒情性を強く放っているからであろう。対他反照的な効果をもたらした点で、実践的方法論として評価できる。ただし「心情」は「日本文化」の特質とは異なり、本来的な主題としてではなく、副題として感受されるべきではなかろうか。だからここで今回試みた当該鑑賞法の意義と、効果を喧伝するわけにはいかない。

本題材にあってモチーフ・情景の種差からの知覚や、同性格づけ（表情と身振り）からの感知が主題把握を導いたのか、それとも画面全体の比較から感受された美的特性がそれのパイプ役となったのか。いわば感性的な味わい化の働きが主題感受を主導したのかどうか。その点を検討してきた。「日本文化」的特質単独は約３割の生徒によって直観的に把握されたが、そのうち『ラ・ジャポネーズ』における描写・彩色法などの造形的特徴から得た、美的特性を前提とした生徒は皆無であった。それからの感受の流れはこれまで筆者の題材実践において、生徒によって確実に辿られてきた経緯がある。しかし本題材の鑑賞では、両作品の画面全体における造形的特徴の違いから、彼らはそれぞれ和風と洋風の差に気づいた。それによって主題感受に至ったのが真実のところである。しかもその数は全体147人中わずか７名にすぎない。

「日本文化」的特質の把握者で美的特性の感受ではなく、和服や扇子、うちわなどモチーフ・情景の種差を知覚すること、及び同性格づけ（表情と身振り）からの感知を前提とした生徒は、合計65人中58件の多きにのぼる。その中身は依然として、モチーフ・情景の存在に全面的に依存しているのである。高回美的特性感受者に比べて低回感受者や、中回感受者にあっては

その数の多さが目立つ。本絵作品は「ジャポニズム（日本文化趣味）」を趣旨としているため、文化という意味の分節が編み込まれている。そこでは描写・彩色法が基本的に説明的にならざるをえず、写実性の方が造形性にまさっている。そのため本絵のタッチや絵の具の付け方にいくつかの特徴が認められるとはいえ、それから美的特性が感受されにくい関係にある。

確かに本絵『ラ・ジャポネーズ』には、印象派に特有の奔放なタッチの痕跡が存在しているものの、「文化」的特質の表現はモチーフ・情景を性格づける名詞的な形象に依存せざるをえず、中学２年生のほとんどは描写・彩色法の造形的特徴から美的特性を感受しえなかった。説明的な形象はモチーフ・情景をトレースするのであるが、それは鑑賞に本来的な、感性化の営為を滞らせたことと思われる。しかし同時にそれは、本絵の主題として感受されるべき、日本文化趣味を決定づけてもいる。そのため作品選定のあり方として、根本的な問題を残す形となる。

「日本文化」の特質は概念的な性格のものであり、本来的に言葉による秩序づけに依存せざるをえない。それゆえ「文化」的特質の表現はなべて説明性・写実性を基調とし、名詞を中心とした形象に拘束されざるをえない。モネ芸術を特徴づける折角の印象派的表現法は、本絵作品における「日本文化」的特質という主題の感受に、貢献しなかったのである。かくて中学２年生の鑑賞教育にふさわしいのは、「文化」的特質が主題として把握されるべき作品ではない。むしろ「心情」が主題として把握されるような作品だ、という結論に至る。それは描写・彩色法に伴う、形容詞を中心とした形象から形づくられるからに他ならない。

註

１）Hermerén Gören、*The Nature of Aesthetic Qualities*、Lund University Press、1988、p.106.120.139.

（平成27年９月30日受理）

『ラ・ジャポネーズ（着物をまとうカミーユ・モネ）』、1876年　油彩 231.8 × 142.3㎝　ボストン美術館

『緑衣の女（カミーユの肖像）』1866年　油彩 231x151cm　ドイツ、ブレーメン美術館